



～ちっちな
小鳥～



～世界の謎と宝の
地図～

kotoriyanews

ちっちゃな小鳥～世界の謎と宝の地図～

”もっと遊びたいよ……あたしの友達と”と、あたしは泣いていた。

引っ越してきたばかりで、あたしの周りには、家族以外、誰もいなかったから。

「じゃあ宝の地図をあげよう。きっとこれを解いてくれた人が幸せにしてくれるはずさ」とあたしを見て、「おじさん」がいった。

彼が、誰かは分からない。だからあたしは今、それを忘れていた。

「うん。ありがとう。大切にするね！」

あたしのなかに”つながり”が戻ってきた。

それから何年も過ぎたとき。

ちっちゃな小鳥は大島小鳥（おとりことり）。13歳の女の子。

あたしのあだ名は「ちっちゃな小鳥」。“little Peace”とはあたしのこと。

世界の謎を解くために、ヘトスダイヴァーとなったの。

「わお、大樹！　なんとこれは地図だわ！」とあたしは印刷された用紙を広げて見せる。

あたしの物置にあったのよ。

「宝の地図でしょうか？」とあたしより背丈が三センチ大きい、大村大樹（おおむらだいき）がいう。

世界的な「地図研究学者」のダイソン博士の息子だ。

あたしの助手の大樹。

彼は、幼稚園の先生になりたい。と思っている。

あたしは新聞記者かな？

この地図の中心には「世界の謎？　“The Mistery of The World”」という文字が。

世界の謎ってどんなものなんだろう？　わくわくするね！

というわけで、あたしたちは地図の指示通り、原っぱに繰り出した。

土管がある。そこには川が流れている。周囲は崖。

「この川のそばの洞窟みたいだ」と大樹。

「よし。さっそく突撃しようじゃないか！」

あたしたちが洞穴に入っていくと……そこには……骨？

動物の骨みたい……。

そこにも宝箱があって、地図がはいっていた。

「これは地図というよりもメモ書きだな」

「ウルク＝エレクの洞穴から宝の地図を持ち出したものは、ウルク＝エレクによって××されるべし。されど、封印の扉は風の扉を90度右に回すべし」

「××の部分は読めない」

と突然骨が動き出した。

「まずい！　崩れるぞ！」

あたしたちは逃げ出した。崩れる洞窟で骨が高い音程の耳障りな歌を歌っていた……。

あたしたちは持ち出した地図を見る。メモ帳のほかに二枚目の地図が箱にはある。

風の扉？　それは……この街の……セントラルタワーのことだ！

風を封じた塔。とあたしたちは子供の時に呼んでいた。頂上には風力発電の風車がある。

「ここに×印があるね」と大樹があたしにそれを見せる。

「位置的にセントラルタワーだな」

「でも、風の扉を90度右に回すべし？って何なのかなあ」

「うーん……あ、わかった！」

「どうしたの？　大樹！　なにかわかったの？」

「最初の地図と次の地図をこの洞窟で重ねてごらん。風の塔、つまりセントラルタワーは一致する。それを90度右に回転させる

。ということは……たぶん二枚目の地図を右に90度回すって意味だよ！」

「ホントだ！　なにか文字が出てきた」模様と思っていたものは文字だったのだ。

太陽の光にかざすと、それが透き通って見える。二枚の地図の模様が合成される。

「テア＝ボロドスの道を行き、汝の道を探せ。そは、二つの道を一つにすることなり。そこに真の宝はある」

「テア＝ボロドスの道？　なんだろうね？」

「あー大樹お兄ちゃん！　その子いつもいっしょにいるね。ぼくと遊んでよ」と川原で遊んでいた子どもがよってくる。

「この子は、小鳥だよ。大島小鳥」この子どもと大樹は知り合いみたい。

せがまれて、しばらくキャッチボールをしていた。あたしがボールを投げる。

「二つの道を一つにすることなり。なにこれ？　結婚するってこと？」とあたし。

「お姉ちゃん結婚するの？」と子どもが聞いてくる。

「違うと思うなあ」とあたし。

あたしたちは町の図書館にいて、PCで検索してみる。

「テア＝ボロドスってぼくのパパが生まれた国の人、昔の女性詩人なんだ。なにに？”彼女は美しい詩を作った詩人だった”」

「でもこの日本で知っているものはない。か。じゃあ君のパパ。ダイソン博士がこの地図を作ったの？　大樹、”答え”知っていたの！？」

「し、知らないよ」慌てているのを見て。

「そ、そうだろうね」とあたしは冷静になる。

「でもなんでこれがあたしの物置にあったのかしら？」

とそこであたしは思い出した。

「思い出した……。この地図は、昔、わたしがおじさんから貰ったものだ」

あの知らないおじさんはダイソン博士だったんだ……。

「帰ろう！　大樹！」とあたしは席を立つ。

「え。でも宝の地図が？」と大樹。

「いいから。ほら追いつちゃうぞ！」

だって、大樹に宝の地図の答えを教えるわけにはいかないものね。結婚とかしたり、詩とか作りたくなっちゃうもの！

「ありがとう。おじさん」とあたしは「恩人」にいった。

「なんだよ。教えろよ」と少年。

「知らないよー」と少女は微笑んだ。

「あたしの……秘・密」そう、世界の秘密は一つだけじゃない。わたしたちに、“秘密”はある。